

「食の安全と
リスクコミュニケーション」

順天堂大学医学部公衆衛生学教室
丸井 英二

食の安全と リスクコミュニケーション

順天堂大学医学部公衆衛生学教室
丸井英二

「食の安全と安心」へ向けて

- モノにおける安全
 - 安全な状態とはどのようなものか
 - それ自体として安全な食品とは
- 人における安心
 - 安全な食品が供給されて安心する
- 安全な食品があれば安心か？
 - 食品は安全だろうか？
- 人とモノとの関係から始まる
- 「食品の安全」から「食の安全」へ

食べ物は安全ではない

- もともと安全な食べ物はない
 - 身体にとっては「異物」
- ひととは危険を冒してものを食べてきた
 - 毒のある食べ物を識別し、避ける技術
 - 調理・加工によって無毒化する技術
 - 知識と技術を共有し、文化として成立
 - 加工、保存技術の伝承
- 「自然は危ない」の認識が必要
- 安全な食べ物こそ危ない

「外部依存」の生活

- 住 → 衣 → 食
- 食の依存の諸相
 - 家庭の外への依存
 - 外食化
 - 中食化
 - よその地域社会への依存
 - 他の国への依存: 国際社会への依存

米国「マック裁判」

- 身長165センチ、体重122キロなど、8人
- 「肥満はマックのハンバーガーのせいだ」
- 「低カロリーを強調している」
- だから、「たくさん」食べた
- 「危険性を消費者に警告する義務を怠った」
- 太ったのはマックのせいだ！
- 結局、2003年1月23日: 裁判所は訴えを棄却
 - 個人責任である

リスクとハザード

- リスクは(統計的)期待値である
- $\text{リスク} = \text{危害の大きさ}(H) \times \text{生起確率}(P)$
 - 危害を引き起こす因子 → 「ハザード」
- リスクのコントロールをどう考えるか
 - ハザードを小さくする
 - モノの管理
 - 起こる確率を小さくする
 - 環境と個人、そして食行動

リスクをどう認識するか

- リスクの評価
 - (専門家による)客観的評価
- リスクの認知
 - 人びとによる主観的評価
 - 恐ろしい
 - 食物アレルギー
 - 未知である
 - 遺伝子組み換え食品
 - リスクにさらされる人数が多い

リスクと信頼

- うわさ(風評)はコントロールできるか
 - ネガティブな出来事はポジティブな出来事より影響力が大きい
 - 信頼:構築するのは時間がかかり、壊れるのは容易
- 専門家の役割
 - 専門家にもいろいろ…:専門家間の論争
 - 信頼される情報:正しい情報とは異なる
 - プロセス、タイミング
- 人々の参加(感)と合意形成
- 公平感の確保

リスクコミュニケーションの枠組み

- 要素
 - 送るべき情報(メッセージ)
 - 送り手と受け手(送信者と受信者)
 - 回路・プロセス(手段)
- 要件
 - 受け取り側の認知度・期待・知識
 - マスメディアの役割
- 目標
 - 双方向のリスクコミュニケーションへ
 - 相互の信頼確保

健康ブームと食のリスク

- 現実的対応
 - リスク回避
 - 受容できる(acceptable)リスク:「納得できる」
 - 耐えられる(tolerable)リスク:「我慢できる」
- 問題点
 - 健康に関する外部依存
 - 自己責任とのバランス
 - 健康増進法「健康は国民の責務である」
 - 食についてはどうか

リスクコミュニケーションの限界

- 伝えられること、伝えられないこと
 - 書かれた情報以外のコミュニケーションを
- 個人と社会
 - 個人的選択
 - 食べもの
 - 社会的論争(社会的受容・合意)
 - 原子力発電など
 - 遺伝子組み換え食品を認めるか否か
 - 社会に流通させる是非は社会的?

食品の表示:話題あれこれ

- 表示制度の意義
 - 消費者の商品選択に役立つ
 - 食品の安全の確保
 - 正確で誤認を生じさせない
- アレルギー食品の表示の経験から
 - 誰が、何を
 - 誰のリスクか
- 「食品表示に関する共同会議」から